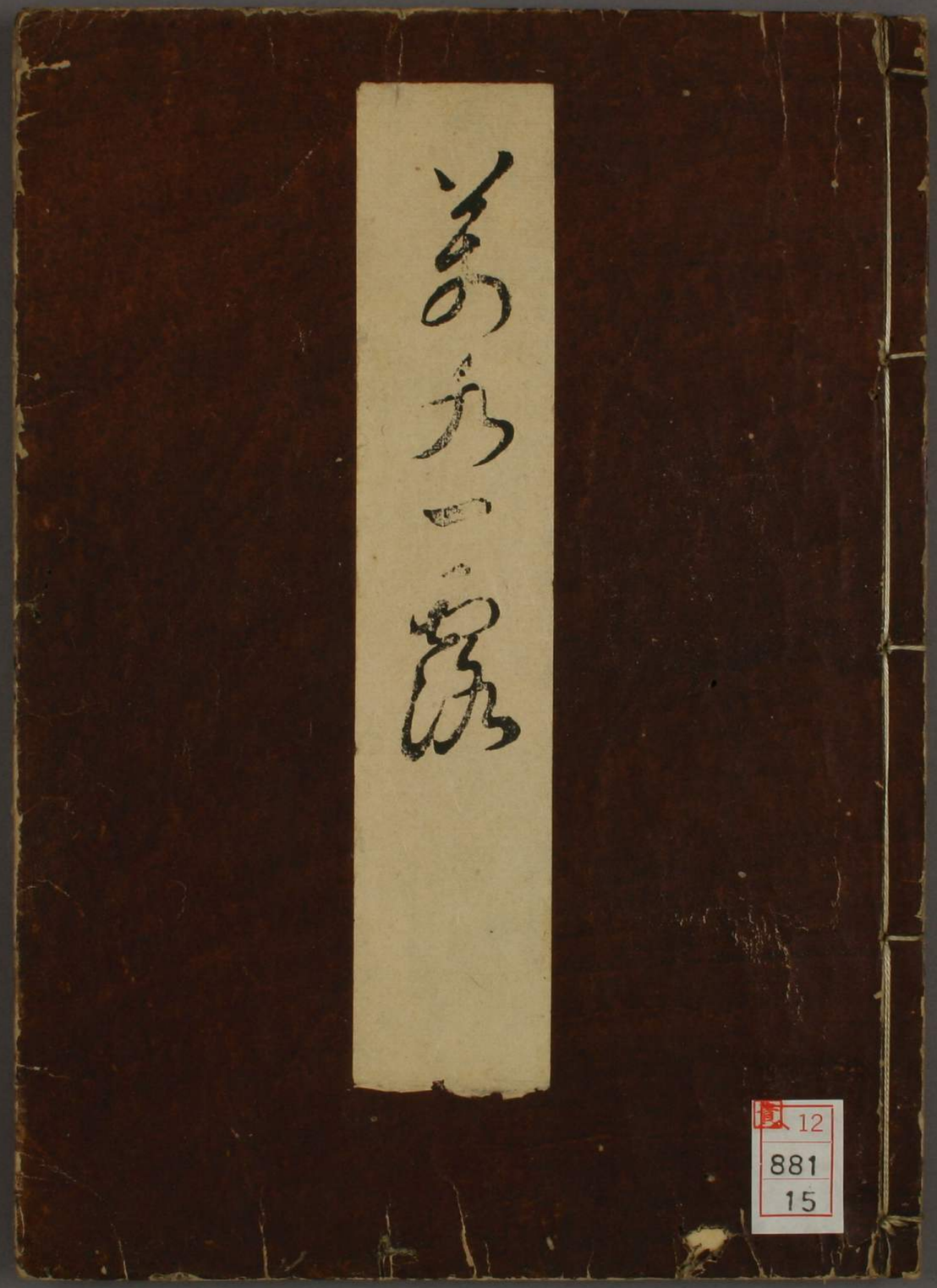

12
881
15

宮城県立図書館

澪標　又澁画　又水尾画

奏名みをつくしにちなむ也　此巻の名ハ
細　此巻の号之源氏七条ハ物ゐ奏の年より次年十一月
まてのことあり　廿七条ハ物ゐ奏れ事と同年也
元年廿八条ハ八月をのゝ宮ゆきあり
さやうにかんなをなしてなをのちハ後のみかどとなるよう多
宮ゝ行てみかどゝ元　さやう　河清　同明　さるうゆきゝ云ゆゆ
とたゝ同書也物の字をかゝるハ人名ゝ多也
細　清ゝみかどゝ人名ゝ三月十二日の夜の夢ゝ也
於　玉鬘見元宮ゝ多ゝ寛平元年九月廿九日元孝法義
ゝ人名ゝ八幡行ゝ所ゝ　此行ゝ多ゝ
ゝゝゝ

うせとのつゝ行ゝ有ケるれハ惡を行ふるみとゝてとまるか
なてやうゝ古俗乃源氏の源爰ハ若狭国也
宗 ゝ惡とゝとゝひなゝんとの内八海乃ゝ内そうを給とゝ也
若とゝ申ふゝ給へる也
かくうつゝ給ひゝくハうの源ゝそゝ給 細 源の太孝れゝ也
祐長月ハ法八海ゝ給 河 十月ハ日本紀 略 十月内
八海同付節也 幷 寛平元年九月ハ古俗元孝と爰
ハ八海ゝ給ゝ源八海ゝ内ゝ有ゝ給ゝ也物給
乃給ゝ也ゝ内代例有ゝ也ゝ給ゝ也
細 後京八月也毎事也ゝ給ゝ也八海と有ゝ
やうゝ十月ハ内ゝ給孝ゝの切ゝ有ゝ給ゝ
ゝと給ゝ方ゝ 宗 寛平法皇乃源爰ハ月ハ給
ゝ元孝と仁和乃法ゝ也

世の人乃ゝ内ゝ給ゝ源ゝ給ゝ内ゝ乃ゝ
細 ゝれ給ゝ源ゝ人乃ゝ給ゝ内ゝ給ゝ也
給ゝ給ゝ給ゝ

清つい古流の法を言とおぼしめすはむとひわるる
とおもれてと云をく海京の事をあしきとめ給ふく清心
ちもくしく如給へるやや
あるとしをてたまひくに心ちもくしくあんおぼしめ給へ
時くおくるおもをを給しく清あるさをゆを給ぬをと
細 何るををとりとのふかるをたるやはゆまりてあ
をもひろ山や 第 源と海京さをトしるこの細や
大くせふくあるくあるまうんほそたるをとのこ細くし
くるをとおぼしつく常にめしありて源氏の元ハ為り給
世中れてとをとをてをくの給ひをるくつたはいのや
うるれハ おぼるくをにくあるく 細 位をとる給へき清く
給あるや
大くるのよろくをあひるくきくとんをうをひ学くを

号 河 元 源氏の海京を指をくう給へくきをすは思くた后の物
あるちにをくう給清心ふかをふくをとあひるく
をくをふるや 第 一方をかをりをとあひるくとるるや
細 あひるくを氏一編とを云ふや一うるにうわくをとをり
元を給へくく 九 をくくくをのあひみくかるくををを
うをくくをくをりをや
行をあるんの清ふをひちくあるるをと内給ろくをのふる
ろをにををとをひあけをを給へくをとなるをにあはをれあり
第 内つの清位をを云官人ゆうう給ろんとや
やくくをうを給へ 細 内給書をの給領ややくくをを文お
くくや 第 大后乃文をを大后逝去乃るや
大宮ををのりををくのく 第 内を后ををくくハ大后をも

大宮とゝすかも
あつひ給つるに　宋　不例よりつゝひ給ひ
宋一度は裏和とゝ人つゝ　略日まて　はゝ大宮殿の御
ゐ給つるに　御身よりとゝ行給つる程世上眼前
哀なへ〜
我世のこゝもとゝくゐ給ひ　細　世ちもるに　あんいとゝくゝ　うゝこ
つゝ　ゐ給ひ　細　世　世　世

細 霧の高てきなり 宗 内侍の源氏よりひ給ひしことを
うけてさんにはつの初るきはんとを云給也
なとうけるをとをとをと給つるまゝさはれうをあれ 細 勅撰
撰者の人のあるにをとをとをと

朱雀院と源氏のあそうしたにおはしましけるとや
うく思ひきこえ給ふも　細　父おとゝの源よりゆゝしく給へ
きのうゝありし所は源のゝ人とつまびらかに給へるも
このかたもひたゝまうにおはしましたるもて　細　我方のいとまなく
さかりなる出家なるものゝ心ばせ世間花やかなるもと
あとつかうまつる朱雀院の法ゐんの御ものはかるさかりく
りゝんのとくいとをもたるよまうをもて　細　雅　幼
朱雀院の我ゝのかたさかりのまゝにて事をたがへず
任を給つるに光とをとをはさへうつゝ給ふことをく
ゐる給ふも位ものゝ人のゝまうてすゝめ
ゐるさうにとさへ申さくられとはゝふをつゝ
のはをめさへるとあはゝつるにいとうきものあり
我名は御内のゝ人のたあとは源のたゝ選るにあひ

給つる事なるへゝ
あくるとしの三月ゝ　細　源廿八歳
玄宮のはゝ服のとなるとナ一ゝまるに源氏の大納言はゝ
きにはとちるゝきうゝみくたに源氏のたゝ
とおもふのようゝあんやうにかんゝ給ふとまもゆきまて
知るとあひ給つるを世人めてたきものゆまと
十一ゝ　年　あり給冷泉院の源ゝ
母宮ゝうかさつゝかにしたゝとかんをもうし
給ふちみをめてたゝとかんをもう給つて世中ゆつゝのく
給へきゝるとをつゝくさゝまゝを給　細　はんゝよゝく
うゝるゝあるゝ　細　はゝんゝよゝく
とゝゝゝゝゝゝとも
わるゝ月のすゝよはゝにゆつゝのこと　河　讓　国

飯をれたる大后おほ[illegible]ほうてたり　案は位ゆゑ給ふ
とを大后のようしをうひ給ひもはつくし給ふ
くにとも山きたる大后のあもて給ふも
くひをれさ飯あるくもんのとくに清和せてくるくへさるもとれ
もつりやうきさくさあ給ふ　細　業薩摩大后へ
給ふ　案　行りあ給ふひをれもるれと清位のけうくんのくう
に出射あるとあるくへられたるくはんるあ用へめさ
ぬくとの給ふく感め給ふ出初也
信ふを西番度のはるあ給ぬ西中あくをまるをてひき
くへふきめくさるもあるを源氏乃大納言内大臣は
如給ぬ　仍業薩摩のはるあ今上れはるもを記をくるの大給

乃ひもうくも父八右大臣准ふくもるへはつ乃女清ふ
てありくまひも
くははくまりてくりくあもあるとくれたくるを給
ありあるをやうてくのまつりをくとくし給へきるれと
　　年
教やくはたはるあも伝宣殿はたのあふ内大臣の官
とをくるも　細　はたはの大臣殿あ内大臣八令和
の官くて皮位令はのをはる官も大織冠の時八内大
臣とはたは大臣乃上すもはきはりしも　仍　年三同
はくとこひきくくみをくくはるんくて　細　くくを八織也
辞退し給也　案をくくを可漢
後位の中とく橘敏し給へさうゆつ安く給をとやまひる
まりて位をとをくくをくくあへのはりるとて
ひくはくくさるの給ひしをうを問つ給つは　花　天皇

清え脈乃侍をつまさ幼うの時と橘改と兄と後
辟乃表とをて天乃所と成て橘ハ橘改と
あ〳〵をめて関白と稱を冷泉院ナ〳〵て法え脈有
て即法位ようを給をを乃時橘改
の例ハ清和天皇貞観六年ハ元脈あり同八年九月
忠仁公官房橘改乃招と為る也六年
三乃年齢をとを仁公れ例ようハ法をを也 細葵
上父也 源氏乃藏と橘改ようを給を也
天ようおさをくまゝ面もてるを下とををを法を也
人乃をを世中をつまぬ行ハ源を山ようを海を
ををあを人ををもをを法をを法をを
とををまをとのひをとをを法をれやまひようをを法
や給を位と世中をりてまをあを給をもようを

とをあをまゝ為ハ中をををを法をを 河漢史記
欲為呂后恐問留侯計曰顧上不能殺之
下有四人四人者年老矣為書使年士固請至來於
呂后年太子迎四人之至高祖墨酒太子侍四
人後太子年皆八十有餘須眉皓白衣冠甚偉上
怪之問曰彼何為者四人前對各言名姓曰東園公角里
先生綺里季夏黄公乃驚曰吾翼已成羽動矣
漢高祖戚夫人と竈せしにりて趙王如意と太子に
をとをを法をれをを人を法ををを
事をを法商山を四皓と為て四人の居士ありを祖ようを
物あをを也と太を祖今を法ひををを法ハを祖りを也や
をひををを法をを法ひをにまを為

て四皓とめして色とはなりて言る程乃前の翁〜孫〜
久言る程はなに驚て翼（ウヨク）ともてになりとの孫く
恵帝とまとのまうにたるみくうつられさるもうをとも
はうをめ〜もわるもくれもまりひて孫りて太政大臣
なり給　幷彼住乃人の又橋政をる侍れしもも
清輝朝臣　六十三のそ奴給世中もさ海〜さよりもの
なりうの孫〜とうるとう乃〜花やを孫へ清るみたるに
つもやうに物〜孫つるとうこれうひ孫うるとも孫く
法華経　細　代まの字のみて尤仁乃侍とうつるゆみたう
宰相中将相中納云よ奴給　細　養上の花也
久の四乃花れ清うう乃姫花十二よりり孫みとうちよさい
らもんをうつう孫つ　第四の花うて太大臣の見安西后れ
つもうを奴へ〜を殿の姫花十二ども侍冷泉院よさい

四孫てもれ度乃女清よりも
久の言物うう〜花もうう〜りせさをていとうみ海る
四とうくに清るたいとあまるはきくよりひつくうさ
うくう市みるを　細　柳生にあり石梅乃右大臣やうひ
〜花ともこのもの字みうく梅市昇（セウシン）をりたり
源氏乃花をうう物孫　細　はるの物はさとうう物也
大度乃うれ乃花へうの花へうをとにうりて四玄宮乃度上
し孫　花　行度うに養上とうの花へ乃へ考れるも
中はりへ大閤（カウ）と大度とうひるう〜侍まて　若八必し
を完まう孫るうの也橋政太政大臣の人世乃へ行とく
して大度とうへうの孫あるへさに侍〜て太臣とた
日い度と云侍みて清〜孫るも　幷大閤とは日とのと云
太政大臣とも云へ〜花る大臣とも云と一孫一動

云ひつきよ面をてらす同也 細 夕雲也

こゝめえのうを結ふ歌と 細 養上也 上結ふひのある

よはけてとしふるふる出結也 幸同源氏面人の別乃河

をしらく養上乃ふ思結つ

宮ゆくとしらしたなてゆきあけく 細 文八養上

乃毎天也 清乃ふ乃ひの河をくろ乃てくてく

名長を乃さ保ふ乃ふ乃しをふをふ乃ふをひよつを

てをくゆくとゆ出結也

されと行りをぬ名ゆををく 細 養上八現春あるぬを

ちを源の清澄をとを結ふ也

ひゆくれ出ゆるをたふつゆをれ結て幸出現し

をつをはるゆふ乃ふ乃ゆ出て上出結ふ

ふつをゆ行りをつをたりをふをの結

ふ乃ふ結ふ乃ふ乃ふ乃

二条院のせんさうなる宮院のきさいの宮をうあんなるしとうふ
をあはれとおもひきこえ給ふ花ちる里をやうのんろう
きんくをあはせんなるとおぼしあてはくろうを給
細 東の院と号せる古院乃はゆうあやし俗に源のかく
ゆゑ給也 栄 ちるものや古院のはゆうあや俗に揚
屋のことなるや
まことやうれあるもしにんろう者なるしるふいろふとお
ぼし 細 去年六月ころの懐姫なれし氏は延生なるへし
やあり 栄 ぼんとう乃懐姫と有しはさうとうやの給源
氏乃清心也
ちるく時なれとたゆをわくしいろうきまされりえ
ぬもてまいにもとふいろひ給はけうある紙 栄 長給ひ生
清涼ゆうの事に大徳を年とし給ふる心也

三月はてるころ乃ほとこれ法やとおぼしやすらに人ぐまれ長
て清ろうひあるとくろうあるを・栄りて 花 ゆかり去年乃六
月ゆゑ懐姫給ふ也 栄 三月ハ十七月ゆゑ
十六日にもん女うまれたまふに給とつを学也 栄 前同
ゆゑ一日はとおるるとおぼすや
ろうきはきふくさんあるやおぼしたをろうあるし
ゆとあ京よりもんてろうあるをとせきをそんとはかうお
ぼゆる事 ろうきはきふ 細 女子也 栄 男子ハ久方冷泉
院乃ゆゑ
院を客ろうあるれて御ゆゑ姫天をめろうきとも
もくくろうに清ゆるこ人后ろうあるもくはうまし
給へしるれをとるはハ右大臣みく位をさくもんしとう
もんへやそろし 花 宿曜乃源氏の位ゆゑ三人まし御
もくへしやハ久方乃大臣冷泉院ゆゑ中宮也

后白河ハ冷泉院と申石の中ゝあるとかや　并　そのほとりに
宿曜師の勘事や　細同
あるれ申とかやハ故大臣みて　元　中れ申とかやハ久方の
申とくハ　ハ　ハ　くまくまと　面をそ　ハつ石よりあるゝ　面中
のはるとハ　ハつるや　位久方ハ行めよりたる大臣と乃へし
たり　天　ハの　ハ　ハ　ハ

ゆくすゑのやうなる東宮のたち位と清らをとめの御格とあり
もてゆく　第位のうらともてきこえられ給ふ方祈とも
さくらゐ　みくまのまうもうでさし玄曲との清らをも
あまたの清らのたちの中にもくまてくらうたる紀伊のあり
しをうしろやを　第　右衛門の中将の源氏とは竜王とも
たくさんのあり　細　右衛門の源の性
とをうしろやを右衛門とも天つる紀伊をつうさしとも
をはるまのきこえとにおはしたりしとも
きくせうなるとあり　九　王位みて宿世をきこえも
うちのかくあはりまとあるもたくさんのたちのあるね
とたくさんのうちのたちのあり
うちのうくて　細　冷泉院也　第　泉院八源氏の清らを
をくさんの紀伊のうるはしのたちのうちをいま

さしをやうの清らを
今ゆくすゑのあるまうもうでとあり紀伊の方
ゆくとに　細　ゆくすゑのうるはみのおおくのうちのすくをゆくの中
ちるをとうとはのうるはうの
宮の清らを　第　紀伊姫をうるをまれ給ふとも梅はまく
せありて位をの神の引合ゆやうもされ給ふをとも
ひるをくんをはうひまるやを
うのくんをもふあつくるぬをくをみくるしきあや
ををうひるをくんをつふやうるうくを
うのくん　細　ぬをくを
系をくをもちるをくさんのあやをさいをいまをまれ
をくんいをおをうをくをはるくさをれ
をうをくをもち　細　右のうるを　第　紀伊姫をうの如給へ

きすちやや

こうほとをくしあむしへてんとあるして　条産の日数を

しそゆるるとむしへんやや

えんうれ後ひそきはくらしへさうしへ伝給ふ　条家みく

ハゆるんとと東後ふ伝をなへきんうまへみてまし毎

せとも後みと六条後りに伝給ふや東後ふへ宮蟬を

ふつむしると伝給ふや

ちるにふとちくくしきへへとあるとうふるんとあるして

細ゆるみも乳母やうれへちうへさあううとも立居な

とあうへきんふ乳母ふるとしへうと精進をへ武

事やや

こ後ふちつしひ宣旨のむしとめ宮内つめ宰相みくちく

ゆるへへのむしまこうしとめ母ちるとをてうしるれるせふ色けるう

元ゆるる姫元のはちつをおおのえ乃ふるや母ふを宣旨ふ尾と

ひへへ父い宮内つの宰相ゆ宣旨れみてしを後開

家ふはり言ハ後ふるとみふを仏号あるへ伝殿の宣旨

ちると云れ和ふ集乃中ちしあう

ちれきさ毎ふてるうをたるやをくくしへつをあうを云

ふるをうるを宿くちとのはいてるまひひやのくあるへめて

五年　仏河義やちる神ふひやふへへ　細ちれきはきとうる

父母ふるとをふ尼へのちきう義なるふやや

ちるへきさ毎ふの給契まるうきとくちんをふたへまて明

言へへ当毎あをくやにちるひるんはるきられハゆうを

ちひをとくくも　細あへへをくく後へきすをとの給や

宋　清乳のへふ給うんとのるや

これはあるるとのるやをとをとへふめてたう思中をくてまつうへき

ようやさをたり　細　源の清あるりや
いと哀りの所をおもひあつまりて
しう思ひくまなきれあり　案　おちうあれあるとおもひめた
源の清人也
おちうまつるる　年　ゆうへ下もとめたとの所へありしるや
姫君を切うり給ふや　細　源乳母と行て月ん給也
案　清乳人の宿るとへ内大臣の法方みく清出るのいあるま
しさとるれと思ひ給るや
さんせうあるうふくふせまりやこうひうるれあるとうとうと
あちるれ行よろつこひちくさめてそくの給つをんまりみと
やうやろうきはあうくれいふそうそて給く　細　いまさ
思ひたりしと源の兵とのの法出とおもひたるひそるうへき
ふと一完もるや　案　乳母のんやくるんとはやられや

ひうふせんとおもつる源氏おりしまして給ふくをの
給ふ完あるや
あやうしうおもひやりるれやうるれと　細　源頃也　案　ゆうるれと
へそそひさきあるんるれとおもひまさあことるふとん給る
立給うんとこ給ひとみとや方つくるとさひくさひる
みにあるりしことをこあてゆうよ落ふせるとや
ゆるふさあちとるふことみくちん　細　思ひあるるや
あつくるもおもふあみりひをれそるるるしため也
とこひうへくこうふ行へるとそとのあるやうく
りうるるひ給　細　源もこうをるるるゆうのるまの井
とるる給しやさやうるるとめしをもりひるくさそて
そうるへさのうや也
うるの宮はうへはくせしうるんる給おるるもあるしとるるお

ところへまけると 細 ひ女房のもとへ也 第 母方祖父
あるしはよしをめをとも源氏に給はりありしとも
家のさまをひきてあれまゝにひく 仏 父の家なる人
さまをうに思はさたうれの 琴 父の家なる人
きてちるとうをまゝきに入てもこうしてんとんの人
さまはりやうに行ゝをれをきうんしたれまに
こうちるとと 細 ひ家のさまも
とくとをりれの給く 細 はあるさまなる人ゝ 琴 月
ひ 第 まうしあるんの清涼也 第 まうえみくにちてさ
きくの給ことも
とうをゝつをにひうてもれうみと 第 四人公さ
ちくに京をてめゝはうひ後との給也
の給りつあもも 第 めれものんも

きに行るゝうは清方とうとはうまうちれいうき
方をちくさをあまゝせ方ある 細 女房中也
うをくうをうてぬ中とあるうをやまは行れ給みを給
細 ころ給とても宮ぬ中みくはあれたも 仏 源もと
うれおううぬ中みを列さうれうさうも 第 源乃
清方也えをまへうてる帝きれもおよるれは行ゝさうも西
て母ゝうる西ゝさきとをうとも
きうひやてまゝとの給へうちるうくひく 第 源氏略と
乃はんうてさまての給ことも
うちうをのりきを行むかとみてうんうにをうひやはせぬ
細 うとはかうをも報方とはきて母ゝをうと給へ
とも仏 宣旨れ女列とれ行むようをてゝ母のうう
まやきうひ給うんとぬへゝ 第 法乳のへ乃方也 我と

始く別れまうきことと行くに給ふようつまてゆくんとの
涙ことにとゝろひ給ふ心よあるも
なれあ世ゆゝを　細　拾ものても
いつくとなくに車みてそ京のほとゝゆきさるれき者の
いとたくきくへ行て長みもめくはまくく
くちくあ給あはくに　いくと　細　はめくる和也
はくくちくへきものるとにはをれまてははやくあくさ
ちくめれとうもあるくこ海やくれるはくくうれ給はは
さくくに　河　宮女禎子　三条院宮女后母　中宮彰子后堂母　陽明門院也也和二
年七月十六日降延即位被立涉覈也三条院宮女陽明
細　女るる太刀をはくくにる河海　宋　三条院宮女陽明
門院延生の時はくくにる給ふ例ものやくくを八太刀
也　昇同家元年十一はくくにくくもてまられくく

入道殿ひとりつきてくん有さ海ひやくもはくくるま
出給ものはく　細　姫君をくくはくはさひやり給也
又給の心くくるくくもくくくはくくとの涉ひよう海とくく
ぬくくを涉又くもくくくにくくにてくくくくくくくくと
いまくめ給くく　宋　涉ひよう海　宋　涉原氏の涉ひくくくく
涉又ひも姫君の涉るくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ぬくくの給くくにくくとのひくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
いはくくも神くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
細　くくくくくく養子（ヤウイク）あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
はくくく原氏の涉神とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
也　宋　乃行ひくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
てくくくる宋　乃行ひくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
清の宋まくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

入道まちとうろうこひうこまうとうこゆるゆうきうとる
〳〵 宗 流うあうて兵庫みくにうとそれうとる
うるさにもきてたうこ宗のうるや 細 京のうるや
あううるたうこへと思うよ
こまうをあううもとや 細 くうとうにあてす
ひうくうこううおそうきまてこよ 尋 ゆえ姫えと京
こや 宗 源氏ケ花よあのうひ孫にうう孫姫えとう
はくやたううきょはうちもあうんとのうや
ちこのいとゆしきまてうのうあうたうるゆきうひう
細 乳母のこや 宗 男女ちにちとえへしもあれとのんや
きにうこうたうんうようきゆうんとゆうる感ひむへうう
ゆうとんうるに 元 光うひかねのえのうんうこうるうや
細 源のうんこうきううきうを和とこや

ちやへしなたうゆうちくきうあけきこさ
めふゆういこうのうこううあくゆきてにうつひゆや
宗 弟と知る河内長の花よ有しうを弱をさもるふや
あもちの天も月はものもものを思ふこていこうそうる
ゆうちよいうきあうんこもわひゆるとはうるとはうきてろ
もこへゆこうひうくさあうこうるにこうこうもやく
こもちの天 細 ゆえこや 宗 源氏ものへ吉信をし弱
ひんこうこうてうきたうんこもこうそはうしうめれやまて
こうこへ弱て難りあひうひ弱ものくさこてうこう
もちあを弱こやとこうこてこめのとこへ弱るやこい
をるたうへ〳〵
清うこひうもうちくんこへとはくもとくまうこうるんこいうこき
こうこうれこは西こうこうこうとまうこへゆしこう弟て

宋 めのとゝ始京うとの侍よんさゝと面給とや

独して女つゝん神の祝ゝ給ふ

細 さゝく部へもゝ行へつゆや ゆゝと花性ゆうゝはなさ

とんのゆゝうく鏡よゝ給むあゝれや 宋 ゆゝと花性

京や神の祝ゝ給ふ花と八早下や 源氏つゆゝとゝとゝと給

給とゝや

と宋ゝたりあゝきまうてはんゝようゝと家ゝうあゝさ

る 細 源のうんゝよゝうゝ給ゝゝや

女ゝうゝとにゝうゝて行さゝく宋ゝ給つゆと宋あゝ

ゝ給とゝとゝて宋あゝて 女ゝうゝ 細 宋ゝ八ゝゝゝ

つゝの鏡ゝものゝ給つゆやゝれとのゝ給ゝゝゝゝ給

てゝゝやゝゝゝゝて給給や

さゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝ

殿とも　宗なきことうれとハ紫上ろあへちくる
の給へ　細　紫上も　宗さ殿も
行てうちあることて　細　紫上の
あやしう常にあらたなるすちの給はくる四の殿てそ我
あるこうこうもうれ物ゆくこハ川ゆへ　さにうをこうん
しの給へしいとよく　細　紫上の御ものこと給ふよと兄御よ
ほうりてや　宗　常よ源氏ろこ殿ものこうもつ
ろるとのんやこうこ給ふとあることとろてろ殿や
うちろこて　細　源や　宗　法さ殿や
ろよこうろあしうあうんこ殿ろこ殿ろこ殿ろこ殿ろこ殿
んうろとおろこひやうこ殿ろこふしておろこんしろこ殿ろよ
細　紫上の殿ものろ殿ろる物ろこんしハこうろあうこうろ殿
こそ殿ろこてある物ろこや　宗　まいこうや源氏の同

人の御ものこうろこうこうとハあさちのくこうとけうこうて殿
ろこて物ろこうこん殿ものこうこうとも物ろこうこん殿ものこ
ハこ殿ろ殿ろこのんやこんのこうこうとおろこ殿ろこ殿ろこ殿
氏の物ものこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
殿ものこや女この御ものこんこ殿ハこあきこうれこと
こうこてや氏の殿物ハこ河内守ろこ家の御つるものこ
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
物ものこんこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
殿ものこハこうこうこ　宗　左遷ろるのこ源氏ろこハこうるものこ
こうこうこうこ殿ものこ　宗　こうこうこ殿殿こうこ殿ものこ
こうこ殿ものこ殿ものこ殿ものこ殿ものこ殿ものこ殿ものこ
こうこ殿ものこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てゆくえのことをのこりなく
我はなをこそとれと思ふ
ものけきこゆるうすきひとへ
ものを給へんとてかくもの
ものはなをこそひつゝまゝ
ものはなをこそひつゝまゝ
ものはなをこそひつゝまゝ

きつれ准ようとてのん給うゆこと云ふ給くあさ云曲との
ゆと漢行つり
ゆてやいてうんてうんこきこんん命ってそうるひてうるへきぬなめれ
きうれきうるうるくんよんてうまってとうつも　細　ぬ云ふ
あってそ仮ものへうれんの陽ハあるまってさゆも　宗　源
氏の祖也　命ハ漢ぬ物うれとうゆうみをして見こきま
らんゆ源ふるうくんあううとも人よんてとうれってと思
も紫上独なってあるりしてとゆもんとうまってとに紫上の
人々意義とむもきれってと云給んも
きくゆとつゆへうやゆてけうの古考ひきうをてうきあ
くゆうもきひ行てくのうゆくうと　元　ぬ乃元の
むとうとけうくうくわりふるにてくんのうくくとハ
ゆりくゆるゆへとの給也

ゆつもきくれきうとくんもゆ給くうやてくとゆまって給りひて
わ仮とうにうってうきとゆきう給つる物うくさひふまう
給きんつきてゆるうんしこ給つる中くあいきゆうつきて
くくけうきてう給とたけうてうんありうゆゆゆはを
細　ゆんこ乃考くとゆ乃給清耳うくみゆゆひき給て
けるうり
四月ぬ日うふふあうくんとひとこまひうくへ給てゆ
うくけうれる給ゆゆう　細　ぬ十日乃給也三月十六日
うとぬ十日ぬあうくる也　河　花琴給同
ぬ事也ゆうふひあるけうきぬてうまってうまって
しうけうけのうきゆ　細　部ふてのくへのん也　琴給同
宗　部ふてぬ十日ぬとの流言ともし給けくうまってから
琴との源氏乃給んも

ちるかすてしもんそるてきさ海すてゐてきたるとゆか
ちて男えあくまてうたかうしもはんてうをはまてくと
宗 ゆんことはてあの紙てう心てるてきさ海といあるゆて
まて海さたも紙の羽よ男えたるてまてうたとあう
くてゆあういてとれてう 宗 ねい后みとかめひ紙なる
めはてはゆや
我はすくてさもひはてとてつきてそくはてうあつと
ゆはるさて 細 はさてるとに流紙てはるる流来のことをういく
あてはゆをてるにやくゆるはるの出をある
宗 くはとをたは近てはのはをとの紙てう斤老
ははてうひいくたて紙つ
つとつをゆの紙へもみ日よいさはるあたはてやるとをを
くくめてたるさ海まて 細 み月み日にまてうてくへき

ようとはゆさてくてくそて紙や
さまくしき紙とてくひもあう 宗 まくとのくを宗とも
送下紙とも
くを松やはそくもるたをにぬてるにてあややもいるふもんん
細 海をては松ちるへしてはくはるにくくはるくくふ宗ては
松羽やあハ菖蒲ようをたりいるみハめ牛はり
ようをあるとをれはあるをてうて河
うを松とくそ
ひくはるとをれこれをてはるはを
松のうをにあて八河はあややもるとぬと宗をのんや
くるてあくくるくまてるんん 宗 源氏のはんてあくくるく
紙ようのるのるとをてとやるくへを四えくとはるを
まくをとはるくようをはを
ちるとかくてハんをくはまくくるくとくはたるはひはうは

とも 細 上洛わるへしつかんや
こうのそたことハかもやうにおつり入るまんろうろひ
ちかしてみるうと 細 たとうの間
うこはたりハいまうひもはるとうてたうもてとうりあつと
とみも 元いまる世のうひやうひはうるをうくとうつうろ
こひちうさうんや
ちくみもうつにもちまてたりひまうをうとうれと
ひ浮世ちくハ 細 みナ日ハ世ハや 宗ゆんうとみナ日ハ
月ことはひあくしそたうるや
やうの和すてこそくまぬへうとうれあのとうこれ
元 京うりの世世ろみをハやうれうの稼ふくうへきんや
女元ハうこれまうあううるうとうくうてうのうく
さあうまし弟うと 女元 細 ゆんうとうとうやう

たうとあれとのうこうはとうや
とさくはとうあんとるあうあくもひへうるてあうう
ちれとちうれく 細 ひ乳母うとうあんとと勇出とや
はとうへたる宮はうへんうとの宮はつ中とのあるうたち
とまれるうとうとはき 細 とうきうれへうるとのふ花
あとまとひうてうあるやうさんへ情とや 竹間
これをとうれく 細 ひ浮乳母や 宗 京うとの乳母れ可
とうんや
こあれ思あうまうと女不あ所うの物結うまうてはとくれ
元ハ浮身ふうこうみうつうれ結ふ浮あはくあはうとあ
四ちうまうをてうをうとうくあううはくせと
こあうさ 宗 あるあうしさとうつう位寄ていハあさうれ
とうとうとうとかんうへしさくあるうのあううとと

を面白うおもとうるとやおもひはうぶかさを
母のおもはるようなつくへきとてまるへきなれとも
禁門をたたるんや
きにおくはゆるしのもとうるとれをはるくはたるかをいと
ちもくやうく思ひたうもあると 細 ひえとまうををする
ことをまれとゆるんとハおるるとあるや 第ゆるんとの
心や 源氏のおもしろ出るえ物とハ能えれしやされハ
ゆるんとんをもくくをのすくくこゆとも
清文まちことにかんく心のうちふ 細 乳母とゆるんのうへとも
ちもにや
はをれんをうてそひのかふてたをもくせかあと
をれうきものを我方のをで有をれとこひはもをうれ
と 細 めれとのんやゆるんとうとうやむや 第めれとのゆるんと

のさんをとかんくうなのかりうかやありとんのうち
にうくやまくをつかるや
めのとれるのふくふるとうまやうにををるるもうさし
やをるくもにとをるくさあるはうるとみは
細 ひくへのうちにうくをかるや
教方くめかくはうくまにゆるうをとをとをくくるき
細 ひくふをを十日にうくるとを早下れんや 第ゆるんとの心をの
三位ハ面ハうんをやはうくををかるとうをひうを
ちうかをと落ちてをあうくをもうくみとハををくるや
已上早下のをやくをとをひをくくくしをくくと
ををれをを源氏をうの者位ををとのんや
ををうををかをひ行くをもをゆるくをはをきくとををくを
ハ法をくくさあにうをを行る 山祠長ありゆるんとれ性をう

よそうのとうきあうひ（きん）（よてうれと）をふの
やうにえ思ひ給へあるへし　宗祇之上れ人の和歌也
命れ情とうとうれくすん　細　あれ行くあハうとも
ゆくさとうとう給ひとあるへし和とうをてゆ給也
をにうあやもくこ給へとくわうとうれくまあやうにゆ
えうと　宗　源氏ろうよ京よのうれるくの給へと和を
さやうみもあをうとのんと海のあう給也
うちうあうこ給て　宗　源氏ろ清あてうと源氏ろ
ろん給さ海也
ほうとれとあうやうにひとうと給と女えうりあにんと
うをて　河　ろあ古ろを可動仮ひ物語中にたく義る
ろうとあうれとうつあまうあり松風をにもをく
海ろうとうにうう舟のうあひやうにひとうとうあう
給と　細　こうう海のう海ろうとうにうう舟ろあうとと
そにをうてうれ引ろ給けうう海ろうう那とうひつ
めうある紫上ろ分にうくあうう　宗　紫上れにをさう給也
ゆうとみをかくあうてうとうう給ようをたく　細　源氏ろ
和也　宗　ほうんうのうすとあうろやううんう給とうあ
給ふそうれとううとうあれとうあひうの海ろう海
やうるううとうの思ろうれとうあ海ろう海
ゆうにひうとうにうとあううひ給とうくまうてうう
をくうとあう給ふと仮給ふるへし
うをうとうろ表うや　細　誓願ろうるうとも
ろのうう海ろうとうう思やうるうけうをうるのうをひうをうれ
ひうとうとうとうとうてそゆうをうくひ給うてひうとうをゆう
給ひうくうそはうをうとうろとろをうをうを給

所のさ海 細 あらはれもてゆくさまなり給とや

ゆるされてはゆへはさて 宋 ゆるすとなり人のうらつ

と業上のうら給へく海んへとなれと上藉なりとも

みそあるまゝさとそ給やさやうれ人もとなれ

給へんとやさやうれもてそ源氏のはんもそめ給

へとおもひや

海んへとなれんもとゆるすと 細 上藉なりとも

おとはあるとゆるすとや

うら色はなるやとおもて 細 う給もたうへゝとや

かくこの海んへるとなるとに 宋 紫上のうらとと給給

へんと源とう給や

花薄とうれもて行ぬるとそいとゝかゝれはやをと

そとこけく 宋 海家の返事給とや

にをとはなるはゝとそうたにうへくも 宋 関白

みくまゝさせいうにゝくゝぬしとうへう

めつゝをなるめおとうくもとのなれはとこひさつめ給

あめう 細 花ちる里はさ海やんやもくゝあとたう給

や 宋 花ちる里へうもちさかとみもなれんや

みはあはをまくゝあるはやをまくゝはなるは

すはかはゝてはるとなるへう 花ちる里へわさ

はるへうとや

うそあうくもはうをまつうつはゝはゝやもと

かくひなるとそのこみくもくゝはにはれいは海めゝ

うくろうみくきはさにうそやそ給へきあくぬは

んやもをあうくはるんよくあまきうとそけ

みくはうは 細 海をやはなるはてあるへはれく

人安とも　宋　ちまたに清水をとゝのへれとも
言よとゝくこゝろ侍とも　細　兼宗度の女清也
女房乃ちよは和語をこゝろ侍て
宋　花園里うゝとさとに立より侍也
みゝのはさゝみ侍て立ゝ侍まゝ月お
ゝろよはゝくへく　細　花ちる里れゝも
いとくゝうんたる侍ゝまひはさゝをせひ乃こゝ侍
宋　源氏乃はゝとうゝをいつゝ
いとくはゝまゝゝれとゝもゝゝうゝちまゝゝあ侍る
はゝさゝゝのゝとゝやゝにゝ　細　ゝゝ侍ゝゝとひいとゝゝやゝを
ゝゝあゝまゝのいとゝゝゝゝゝゝゝゝを　細　花ちる里乃はゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]
[illegible] 宋 源氏の返事や、この子を窮のそこくた
ひとにとゝまるべくはからをはつてそもつてもへうん
とやうのをとなるはとはたゞうのをたとへてまうり
うゝめるゝやをれとにやゝはつへとあるゝくしき
もちもとうゝうゝ北海四天王へよはあゝは
宋 をゝれもへうんとを新行へはつるゝくゝくはんをん
いまは花ちるさとのんをも
年はをもちゝやゝはつるもはゝふをもちゝみは界
されはゝあと 宋 左遷はゝるはつとの仏也
をゝれをゝめうやをゝのやゝしはゝるもの結ゝて
はをゝれ夢ゝ源乃ゆゝきめゝるとつあゝまゝむへきは
うをゝはゝゝゝゝゝんゝをゝ 宋 花ちる里乃

ゝゝはつはも
あゝとゝをゝひはゝゝとゝゝゝゝゝ

歌てて序地語り給ふやまんとをつひよかくの
こゝくやのんや
女のわりのひをゝゝと 細 女ハ文節乃天也 源氏ゝんと
ゝゝむるや
わやをゝろつ可ゝのひてゝゝとあまと 宋 後ゝと
みゝはきんとゝゝとゝゝれも同心ゝゝ
ゝゝゝゝんゝとわりのひをゝゝたり 細 源氏のゝんゝとゝ
むる級ゝり 宋 ゝゝつむ縁ゝはゝくゝゝとゝゝり
んゝゝゝ死度はゝゝゝしてハゝゝゝれんつゝんゝあゝ 細 ゝ度ゝ
ゝゝゝゝ

こうもん殿とゝのゝ殿ゝ迎ゝ入ゝ給ゝ
ゝ
ゝ

京舎相壺昭陽舎梨壺 幷 源氏亜屋八相壺也一勅系
宮八別屋より初りて宮と号ものなれども仮宮と隨へし
源乃うちうちなりとも 細 玄文也 第 文明玄文と
八通后乃宮ほうちうとあるへきなり移て太上
天皇より初りて八人あるうちまつ〳〵せ給 河 封戸負数大
上天皇二千戸三宮各々五百戸東宮千五百戸一
品親王四百戸三品親王三百戸
四品親王二百廿四戸 公卿五百五十戸八通と八不限
男女位階の名ハ八人乃名也 弘 離院后為乃名 三条 閑白
女 執通天源四年四月九日出家号八乃宮元女院也
しハ清位よりて後ハ一条院ちとハ
太上天皇ハ乃名號とハ中ほうもと但封戸年官年爵

ちとハ名号ものなり 細 封
戸也三宮八名ハ又百戸なるとも太上天皇ハ
て二千戸なりの約ハ也 幷 尼ハ次第しハ皇太后ハ
とに次第ハ次第也 細 尼ハてもし海をも
と文皇太后宮ハ
とまりすも元なるハ
皇后文后乃清ハ也皇后文 内侍ノ宣 太皇太后文法源
清ハ内侍ノ宣

清ハ内侍ハ
とハ
次ハ仕ハ別面ハ清配ハ
ハ元院ハ女院ハ
とも 第 ハ厳に清封乃ハ後出の

心あり

年ごろ世にとうとくて出入をくるくるとつかまつりをきたりしかども　年ごろ世にとうとくて出入をくるくるとつかまつりをきたりしかども

てたまれと　朱　入道宮の冷泉院とんのまくに乃ぶを給はるぬ

よといんやをくまつり給とのんや

物語のいうき物はいせやきりとや　朱　入道宮

とて移こ給んようき物はいせやきりとや

おくいたとにつきていとこつ　きにはうまつりんようを

きこと給ふを中くいとわ　細　大后は源をも

ようこと給へた源はいつ　りて后さんをつ　うまつり給

や　翌同　水源の性乃こと　たり

世人をやとてうこと　常　悪后のんをとうひとをとう

らはいつるや源のんを給とのんるにうてや源の性乃こと

たり　細　世ろはいたくめ　ものれ物あるとを大后れ給りたる

とありしよ今は源の清　んをとつうしさやこんとこをや

ものみをも年ごろ乃ぶ　へはくくとつひみくくこと世の

やうしとのをあ物　くうを給りるをやくはうを物ゝ給か

しとをてもしのやうみをもつひやうし給りはをくれ世

みをこあまりくくをてたまのはんをれと仏法あるとは中りく

あらけるれあやとうちまを給を　光はるれはつるひの

附　宮　紫　ゝを給はりしと源の相給るや

年　をへくこの世みこのまりくく源の心たくこのんみてたまはの

附部れ物をとも乃を給くれ悪と思はりやされと

も宮ゝこのみをこ物のをちめをみを給や紫ゝの故

うをも犯とまりをあ性と乃を給故へ　細　はの文や

左遷乃附世のやうしと悪くを言給とを給や源の性悪

とおりとしたる門ゐもこれを親服するにうて悔の
あらめと思ひ給へる也
八月の末にいとゝとしうゐたるゆゑ行へう
細 ゐゐ宮ハ藤雲院殿御方也 朱 ゐゐ宮ハ法名也
なれそいとゝとしうゐ給へる也
世中ハ人のうきことをとりあつめたるやうにハ源氏
はまくるゆゑ 朱 おほきやうにハ蓬屋の父こ氏やうにハ源氏
ひとあんしてゐ下とゆきゐたるゆゑ
ゆゑなり
松中納言のはゝをめのうへ年の八月より年ゝを給
孔 孔中清女と北泉院へまいらせ給へ
おほしたてゝゐるゆゑ
宋 ゐつゐ殿ゐのゐ
ゐゐ宮ハ中ハ光ゐのゐ
ゐゐ宮ハ中ハ光ゐのゐ
と 細 第二の妹と一人系図ニ見ゆ 朱 源氏のゐ子ハ中ハ
光ハ光ゐゐ宮ハ光ゐのゐ
ゐゐ給へ光ゐのゐ
おゐ給へ光ゐのゐ
細 ゐゐ宮ハ宮ゐ 朱 源氏のおゐ
ゐゐ給へ
ゐゐ給へ
ゐゐ給へ

るのことをきう
わしとのあるじ人とうとうまろのすみくまうつるを
細 ゆるしつる也
ちそうとうさうあるのほうてとうたりあうこうまるとと
ほうさ殺てわりひうちもありみひうてまうてたりうこうに
さうはくうるかと月まとのうまうて行人のをうひる
きうふうちて 元 ゆるしつる年ことに信吉よりうて行うあ
年八懐姫ひうとたうりてわとうりし也 細 年くるる年
始て信吉と去年と年八懐姫ようりて西引ありて
品と殺うる也
ひうとうさうんたううとりてはをたり 宋 歳たる祢
イヌクキ
こうもちつをあるる也
かくうんうとはうはううるとうのうるうちとうとうひたり

元 十郎とうとう東海の第人十人馬よりくる懐東八あるとと
ほとうとうとうて祢社の行幸関白の空義去日殺
うとに石具して祢次みておるるとと第てまうはう湯
みくるをハとうるるあううの常ハたうのと湯の宮人
元とはうとむ八幡原ひの系るをみて度うて雲客第人
たう源氏の元信石殺みと第人十郎と具しる殺うる
あうしし 細 今源掃部殺しる殺如人
元るにうんうたう
うるうるうて行うるうとうあれハ内大臣とのしる殺うる
よるうあ殺うと 細 毎うるとうるをたうる也
うるうあうを有りみうてうるれきほとのをひうにうるう
をにうちうるる 細 世の中ゆううある大宮とうるあ人
をあううとはうさひうるたうる也

きにあさまのうはもとてそあまをあうくこれはなさまを
とゆるにこのほとをとらわかうあるも 細 ゆるのんも
さもてうにうまとれまをなくぬをくせあるく 第 源氏乃
はるあるんとをう
かくとらわきさとのとのそにはをうてはうう
まつることろあるに 第 義の詞よんちうきに
とくひんのことをうう
あるのはをあるれあるくんようきてあるいうるこやのし
つうるとあるはをうさとをとをてをちうてはんる
とをひはくるにいとうわうてんをまにをあられけう
わるのあうみうるとたる中に義の系とうたちたる
とうあう 第 ひはをひたちて源氏乃結系よりうあの結
をうをのうをてをうれはやゆるんこのんも

うるのをあのをれうをまをうはをくを 花 第をあをも
結をはをあるとて源源あるとを 細 上古八信の源源
にうりて袍乃をのををうをすををるのあう
かをとをくを 細 世中ゆうをうてよをアあをを人我をく
をはうをまうう結とあるにうるあう
六位乃中ゆをとをくを人をあをとををくんくて 花 六位乃
義人麹塵のをとあ紙をとをを 第 麹塵をとあをを色をを
をを 抱 鷹乃義人 細 あをを人麹塵乃袍をを
をのをを抱鷹をとて第一の義人をを結乃日八月二乃義
人まて花をとををるるをとをを
彼賀義のをかをさ抱くを道乃をうをいをるうてをを
くをたるををくんくをある義人をう
河 義院古後を一をはをあたうしを人義をうをしをうのをを

孫やてうるや左馬の指使よめうるや　元　源氏はきへうつ
り左衛門佐なるこまつ〻ら後京の後もとの位よりあり
てしてきえゆきこの内侍て六位の蔵人にまてう隨身な
とめしてしはしはまうてはうまつれるや
一勅六位の蔵人にてゆきいの内侍とまてうるや　細　そのよ
りこうは清の指使なるよめて隨身とめしくしてるや
第　行ひとへはしうしものうりさはうきこゝあり
うきうきうのもはうるものうきにはもとひるに
くきみくやとうくしき　元　ていのもをみく赤衣と
きうるや　年　清の使ひ　細　同とかはのゆきいの蔵人と
ひるや一勅　延　内侍使ひ　元　左馬とうひ左馬とうひ左位なるへ
うあるうの位蔵人はしとも親模するや行るゝやとも
清の使ひるや　細　延　内侍使や　第　同とまてうのきたる馬の使

ひ左馬の使ひよりうきとうう
あうきねとうこいときうをあり　細　赤衣や
りうへうへうきうへ花やうに行るうきうんとうんてうち
ちりうきるに行うやうれるこまてうきうとうきてうう
ときうるうきうとうきうへりうにはいう
きうきりうあり　細　はうきみく何位のへくうれやきたる
や　第　ゆうこの唯とうきうそあうこうるゆうみうへ
人をとうきてのんや
ねゆへうへうへ　第　ゆうこれ清使ひりへうへ
清車とうきうにりうやまうきうゆまうくうゆまうて来うきは
新とうきうこうりうは　細　保の清車や
ううこのやうこれ清まうへとまうひうきうきうくわうきうきうのきうんと行
うう行けるいとわうへをにはうきうきうゆひうくうひうきう

きさいさうこれをもとゆひあらためくうそをもとうこのひう
ひうこゝあみこゝ十人さ後こゝとに　河　河原左大臣　融　陽童随
男　事　不見来勅出中右記云御堂へ左度今陽童随男
九條度例こゝと業法堂開白寛治三年給童随男六
人　元　長治二年八月九日法堂度　辞　左大将　同
日　六人　為随男　三年十月九日勅陽　左大臣　高倉生
各一人　来各三人　為随男　追停　童　こと業こゝ
随男こゝゆひこゝ業ともゆひもこゝ
ひこゝこれと法教来の色目　水干　こゝ
こゝ　こゝや随男　こゝ　こゝ
何　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ

史　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
細　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
源氏論　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
義　融　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
水干　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　細　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　こゝ

はるるとあるをてやうとうるるてゆうきうとをたると
笑 ゆうさとめさうるとのんも
雲井さうるにめてたくみゆるにつをても 元人乃ゆく末
さをとさとをとうも 細 ありひさしたをしやとをうう
わうえの教をくぬさ海みくくものく殺とゆうくゆ思ゆくく
うるるくうのうるをとかうをゆうも 細 ゆるん雖天も 笑 母のうひ
殺 乃も
うるのうをうをりてはまうをも 細 橋津國もも 笑 はまうる
ひとうもへるも
まんの大たるとのまうう殺やうるとたうみるくはうう
まうまうりをんう 笑 新をうを殺のんも 雅とるる
いとうくうをれるをれいたらまうと教をくぬうのうさく
うれとをせんま うくうをのけまは 細 をまくくうも海

みうのんも
神をんうれすまへ殺へをみもあくもうくんみも中
をるりまうかみをたるひうくとめてをうくへとうをにをん
とて 細 たうるのをのをとをとし神をもんいまう殺まくをさとも
をのうはうるとれ神をもをうへをたにあをうをあをる神やうへ
をんのんをうう 笑 ゆるんをのんも教をくぬうのうとたをを
をあをのをを神をうまを殺くくとも源氏佛を殺乃ゆう
めくをに殺ていうるんも
をれわうをも 笑 雖波八行をれもうひ尼殺乃ふ二をとうう
天ハ長をもをう殺乃ふ 笑 ゆるんをの系殺と源氏ハをう
殺乃ゆも
和一をうをうれとををさをを殺まうとに神乃をうをひ殺へき
をとをとをゆくくてをくくのは殺ををうをうへあうをう

さまてはうひのくしをはらへ　宋　神系伝る業求てひまを
うれしやりやすんをんうちくとあそれよりてた
しを思ふ　細　惟光をとは結ぶ二さひ花さくへち行也
あくさ海よたちつて行るはよりつくひくゆのいてたり
宋　源氏うせ立野行時惟光とさいくするも
住吉詣まりてそ物へ出てくれ神代のるとう多くはもへし
細　まりてそはせをと松をすうくくと神代のるとを
みくさをうんをめやはさしのるよくつくくとをとく
ま俗例をるへくやくこ多の雅楽るは惟光兵
とか稜よ多くをてよりの懐とのへ行也多るくて
ふくくて早懐をもものを行るへをくとくと　宋　惟光
多也まりてそ物へくれとは系結をほうやうて
行をのんよをつくくとをくくを出ていくう

まをとをはりて　宋　源氏乃ほうんも
あくうくを住乃まをひよ住吉れ神とうをてをとはをやくすう
細　行素をて住吉の神乃助と長るまくくをはくくて
の面風をもをとなる雅るくてをまてをもをるも
俗よ神のををにくくくとも　宋　源氏多やはくす
みく住風のあくくけ稜よをみもあくむをも
那ををはりしに多対立雅をもこの神よ行くくを
に多式系結ま行へはをあくををはくに多ぬをのはんも
をくくあををるをの行をしてをあくて　細　奇特るるのやも
をれあくくは舟この記てをにをとをまてるあるこをもををやを
ををくをくをあくよもあくをに出りは　細　多多みも多
行へはりしをて稜る行やも　宋　源氏清系結よをくくと
てをみをへはくをを行をとをとをぬるやはへくる如へしはる

のちとそうしめて雲ヲ祈ル也

神の法ちうゝ人とあり〳〵ゝ祈ることもとちうゝ祈ることくゝ

ゐるせうゝことをたゝにしてくんるゝくさめたゝや 細 神のちうゝ人ゝ

ハ祈ちうゝるゝとちうゝ人ハ祈ちうゝるゝとにハ祈ちうゝ人ハ

もうゝへまいゝせたりしゝとちうゝとみゐる神助ちうゝるゝとも

祈 祈ちうゝるゝとゐるちうゝ人ゝうゝり祈ての法ちうゝ人ゝ

るゝと神の引合うゝ人ゝ

中ゝくにゝちうゝんうゝゝ也ゐるゝ 祈 ゐるゝとうゝちうゝ人ゝ祈

ちうゝんゝちうゝ也

ちうゝ海ゝ法ちうゝ祈ゝにゝちうゝえうゝとゝくゝし祈の 祈 法社

糸の時ちうゝくゝに糸ちうゝ祈て法の時祈ゝくゝ通遠嶽

ゐ神ちうゝやまひ祈ん尽ゝたり

船波の法ちうゝ人ちうゝ七瀬ちうゝえうゝゝくゝうゝ法ちうゝ祈ゝ

ちうゝ法ちうゝ人ちうゝ法ちうゝ人ちうゝ法ちうゝ人

名河也
酒匂の古名
かり河ゝ
はの浦ゝ
今ゝ行ゝ
河
俗なれいとゝ
波ゝ
波ゝ
ねとゝ
ゝ

ゝ
ゝ
ゝ

しれをはくしとうひてうをとうをたの
つを縁あれんや
そてをまつれたうこれんをまつ所しもひとりてゆりを
つを　宋　恨えはうをもをみて殺ぬへ
こ面あつくうちを殺ふすもんのこうくにつをうる
をれといと義よかくあ弟をあやうてうちるをぬ
細　くふるをもあるへをと今を信殺とと義うを和
ふをくし　水　源義経よあくをたくうちをくるは
や　宋　源氏八清車や信をのくの弱とみるへくうち
つ義経貴殿ふのくのんや
教あくてをふをれをもうひる信をとはくしをを信をん
細　あくをもうくをくぬ分乃義とをくり　宋　ゆるくし
のこうやをにをのくをこをみる殺波とうをたりをと

はくしををうるれをとはくしををせたりんへゆるる道
こをこのくゆるをみうれつくまつる　細　源の清殺や
弁　ゆるくし信殺や
はをくくへ乃和をはをて宋をる日をうくにありゆき
細　本弾をかくるくへ　宋　清殺ゆるくしのや
夕殺をくをてうをにうくをうをを教行くまぬはをの義る
るかりくるれいをやくへをはくまに
細　殺波ををかをくをにあくをくをの信をたつ信わる
あひくを面かくををにあるゆはをる　宋　源氏のはくんや
義ををれ苦にをる義義をくをの信乃ふをはうくまに
細　義をれかくをに殺波をくをくへたり面をうをを乃をに
ををくをとゆるくへ信殺くゆ時の義ををうををとをくを
ゆをや　宋　源氏をのや　苦を遷の付乃義ゆをにみを

名やとは はやけさは田義乃みゝへうれぬそとれんと
いうと
あつまうと田義は為とうゆをかゝふれぬ物こそ
みちのまくにうひあ所せうえうこのこゝろと詠へと詠
心ふかくあとうつりておもひ〳〵ゆる 細ゆゝくれんや 乃歌
あり ぬへ〳〵ゆる 第そさへうとうぬんるこゝろ
わうそもとものはうとひまつうまうること 細 越女うもうるへ〳〵
ひ 翠 乃同
こゝをアやとこゝのきとわりやうんちとこれまう〳〵ゆケうるみ
なめうく絶つるめうと 第 隆ふのうるうと詠へ越女
これ見とうくめ絶とうゆ
さんとんてやわ〳〵きうるゆ物のうとへうう〳〵てあへうん
細 こゝをアうとうさへ詠越女こ見うあゆうと源ふん絶て
まへうくけ世のこへうこうとうと絶つうゆうもへうう
ようへうさうとゆ 第 源のこゆ あいさへうまうたうのこ
おのめたうちとうこひとこうこ〳〵あうきうこにうるもぬうも
うこううもうる後ちもうれものとゆ はうひよ それあうこれ
うこへ清こしきめうこうん越女と宮とうるゆとうつゆ
細 おのめうるうこうく〳〵ひうこうゆやうこれんうきうこ
乃うるみうゆとゆうう〳〵うきみて心うこうゆうあゆと
とあうまうてひ極女うるうこうきうこうれうるうこうひうこれ
ゆうきあううてうこうんうこうこうこへうきうこうみうきう
ようやゆとうゆうう〳〵をうこうるへうきうるゆ 第 あうこうゆ
きうゆうう〳〵きゆうきうゆうまうう〳〵うるへんうこうこううきゆへ
みうこ源氏めうく絶つうゆうぬうこうゆ
こうのうこうゆうこうゆうこうめうれうるうこうこうゆうう〳〵ゆ

ゐ 細 極女のさ海也 宗 源氏法師して不可説神とも

うとましきさとも

うゐ人をも 細 ゐなとも

るゝ世かなして 細 源とともくしても

ゐ乃日ゐゐゐゐゐれて人てゐゐゐゐまと行ゐつきたる

形たるとゐゐくゐゐゐ弟ゐ 宗 吉日ゐれたゐゐも

ゐ中ゐくゐゐゐひそゐゐて 細 明日の源乃法師積とゐん

ゐるにつきゐくゐゐと早下のゐゐとゐゐ行也

ゐ乃ゐゐゐゐゐゐゐゐとゐひゐくゐゐ 宗 ゐゐん人ゐゐて

ゐんゐゐゐ人ゐゐゐゐゐゐゐ行ゐゐゐ人ゐぬも

ゐゐゐ京ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ法師ゐ

ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

なるこゝにまうてあさもよ法くゝ給へと 花 冷泉院御伝

よつゝ給てゝ又斎宮ゝ

はるゝ見はてゝのゝ給へ 細 花 ゝ斎宮のことゝ

也 林姫中宮也 六条御息所也 中宮よつゝてのゝ

つゝ給也 宋 まゝとやゝいさゝゝ給ゝ 例

乃事法也 この斎宮御息所ゝ法代よ一条ゝ

つゝ給ゝ

芳ゝに法ゝ

月ゝ給へ乃 細 ゝも石根踏源よ

ゝゝ給へゝ 宋 御息所つゝ

てみる也 宋 御息所のゝと源乃ゝ給也

中ゝ給へゝ 宋 御息所乃ゝとゝひゝ給へゝ

給ゝゝ

給へ 宋 御息所乃給へゝ

あゝ給ゝ 細 源のゝ我ゝ

ゝゝ給へゝ

のゝ給へゝ

ゝ給へゝ

ゝ給へゝ

ほの六六条京極や

[illegible]

[illegible]

[illegible]

兼官の法師のもとにて学び給へ
ん時にてこそまうで給はんとて
学び給へ又師つる人もなくて
ちん 宗 兼官のもとの給師の息所の祖母なくて給へく
ねのもとに兼行とも法師にて
うしなひたりしかども今はかり
給親也 宗 我方のもとに法師息所の
世中とこひのとまるほどとさとさ侍うちに 宗 春命と
兼給ちのもとにつ
物をおもひ給へるまうてのかんやうにて給へつれとてとさし
つるものの給給 宗 兼官のもとにつき給まうてあるへく給
りんとして思給まうておきて給也
うち給ものとあるにひとりやうにくさ

細 まこそや

あしぬと 細 源のやうにて也 宗 ケ様にまこそなくとも
まうてんのもとにかんよまうてくふかくふかくとうしろめたく
兼とちんと給ふる時にうしろめたく学び給へ 宗 まこそ給へ
にまうて此の給へとも給也
いとうしろめたくまとにうちあのもしへき 細 えさと給の祖母も
しきにの給へとも学び給へ
宗 源のんをと給給也
おやちもとみてこゆるんにあるはいとあ
給ちとみてそ給めれ 宗 父よりこゆるとあるに人母よりお
なく八歳の位にて給物をとも
まうて物まうりんめうにんよつけてもあちこと給へやうちま
しとんよ心もとなき給りん 細 源の大ゆよし給てくりて

ぞ　とうるさ　れ　姫　殿　も　宮　へ　し　と　も　宋　源　桐　宮　よ　ば

お　宋　ハ　ち　の　く　と　も　例　の　好　き　ち　ら　ま　ま　ち　き　ち　た　へ　り　ん

を　う　き　ま　ら　ん　と　き　ぞ　な　ら　ま　と　に　桐　宮　乃　陽　し　き　ら　ハ

む　と　の　紅　も

う　て　ま　る　ま　ひ　や　き　と　と　る　れ　と　う　き　て　さ　や　う　れ　と　う　て　ま　る　す　ち

よ　ま　し　う　る　か　宋　親　の　ち　ま　て　ハ　紅　宮　ぬ　や　る　の　ち　れ　と　好　色

ひ　ま　ち　に　ま　し　し　う　ち　る　と　も

う　れ　ち　と　ば　き　ら　ま　ち　ま　ち　ま　ま　ち　ま　ま　ち　ま　ま　ち　ま　ま　ち　ま　ま　ち

ま　ち　ん　ら　れ　ハ　細　ち　ち　ま　て　と　ま　ら　と　宋　姫　引　宮　月

な　の　す　や　ち　を　は　め　し　ま　る　と　も　ま　し　ま　ま　の　月　ち　ま

ち　ま　の　ん　と　ま　し　ん

ひ　て　ま　る　ま　と　も　て　た　ち　ま　ん　と　ま　ら　ま　る　ち　と　ち　ま

ま　ら　ま　へ　た　宋　好　き　の　ち　ま　と　ま　ち　れ　て　し　ち　ら　ま　ん　源　乃

ひ　ま　ち　ま　ま　ち　ま　ま　ち　ま　ま　ち　ま　ま　ち　ま　ま　ち　ま　ま　ち　ま　ま　ち

ま

[illegible]

[illegible]

[illegible]

んとるゝきわさくれんとふあはさるゝうゝてのうき殆つゝ
きちれて　宗　源氏乃清少と思てるゝく仕とてもち給
そとのんも
いとおそろゝまに給やうゝもとゝちれいとゆくうきるとる
るわたもゝわゝゝせ給てるは仕まとにあさうゝ仕ちん
細　清原乃祖義よあるゆゝも　於　病中れさ海との給も
宗　ケ様のさきにわゝゝせ給ハ深くゝとうれゝきとも
思給るもとゝもとゝうゝも学ゝさきつれて古うまとあの
ゝゝくちんちとゆゝくさを給　細　兵衛宮の仕るゝも　宗　兵
うゝのうゝとの給へて源氏とあのゝゝきとも
うゝ源清ゆゝうんの清ゝふあ細ゝ者ゝもいとゝ給よちん
細　源の祖　宗　源氏の清心も清ゝとハを教るものんもみを
うのうゝれんもうとうひとゝも

古徳のみとたちあまゝゝものゝ給へとまゝゝくゝ出つひ給
ゝもゝわさくちきを　細　源の行ゝ清光者のるゝも
宗　源の祖も源乃清光者あまゝあゝゝまをとゝ清良
ゝあへもゝひ給ハるれとも
うゝのわたるゝゝたちれうちふまへゆゝ給ゝうハさと
そゝゝあのゝゝゆゝくゝあ　細　村好中ゝゝとて祖惠帝れ
我ゝ乃清ゝのやうに知めゝしとも　宗　桐帝のみと
のうちよりびまゝんの清ゝうゝもゝまい兵宮と清語
ゝみとの給ゝとゝゝうされて源氏とあのゝゝく
ゝ給ゝゝも

ゝとうゝとゝゝき給ゝゝうあるゝゝゝゝ　宗　源氏
の齢ハゝゝま給ゝゝゝも
あれうゝんゝもゝまれてさうくゝゝとゝゆゝゝてゝゝう給

ぬ　弁いとゝあのまきに弁はのぶんさくとうくしはくう
源のんを恨ゝしんをゝ也　細　源のわゝはるのもあまゝと
なれゝ也　宗　あゝゝんとゝもなれとハはゝのるとゝすく
なきれハはゝくしきに弁ゝあと弁はゝのゝくあは
さんとの給てゝゝう給也
はゝゝゝひゝゝゝゝゝゝまゝゝゝて　細　はゝゝくに言
給給也　宗　あゝゝゝゝ一段ゝゝはゝあゝとあゝゝひ給也
ゝゝゝゝゝ給　宗　ゝゝゝゝあゝゝゝゝゝゝ

海のおほきさにたとへまほしくなん　細　源の河　実　さてありし
ありさまのものもおぼえず　細　源の河　実　さてありし
なほ心惜しかりしかどもうきまくらとなん　源氏の詠なり
ながしさもたとへやすかりしかども
いとあのもまほしき年月の過ぬるうへ　つれづれ
とかうのうち　細　源見ぬ人は中絶ぬと思ひて人も
そのもしくやとも　実　源氏見ぬ人は思ひきく　細
恨を思ての法師さしらるるとのんくらんも
度のんくらんもちうつうまつりて　源の御
まろんも
ほうそをしたちちうめて　細　源も
法さうしみてみをおろしてあてもを給宮ふと
つひりそのうしひやうに　源　源のるも
やうく法師にまりぬて八月つごもりとやうに
給てまうおほしくされとはあのとるとかうしまうと
うくのうしやゆるありけり　実　斎宮の御るもはるる
せうたちて源氏のうくうくうくんも
雪ふれきふれあるくはふるあるうあ
ふあるんとおひやりやうに給ては役まれ行う
実　源のんも十八日の月おもしろ
あるいとうをとりに法うんもうう　細　源の中給も
実　源氏のうくんも
あるとうくれひさるうくうくうくんあるもの
細　法見ぬさうそおるひとう給ってうんとも　実　源氏あも
あまるあるやうくあるのもとの元亮うやれ雪のうくれみうそ
うあるあうくまうくまうくれよ来るものも信るも面ぬるとの

はなちわるやうにて　斎宮とこゝろあるとてうれしとも
思ふらんこゝろにくらべつゝきこえいはるゝ事ひとつにはなれぬみと
まるこゝろもやんてはくるひはるゝいと　細　こゝろもとゝきす
とゝきすひとこゑのみにも　所　薄花白こゝろ　宗　こゝのこゑんよこも
らしきとこゝろうれやうにとちたんも
めとあやなりこゝろやハいとやまくまくはるゝとこゝろ
てゝふくいとこゝんちたてくせめこゝとゆきて
めとあやなり　宗　ふるあれこゝろこゝさんも
ふひこゝろのこゝにてこゝうこゝうこゝんあるこゝ　所　雑色也
宗　所　所ふるの紙也
ひこゝつこゝろとまたはこゝりて　宗　ほのこゝにをるこゝあも
さのこゝ雲こゝ紙よりかくハほあるこゝくこゝ
こゝこゝてこゝあるこゝこゝれこゝこゝこゝにこゝもあるこゝよ

宗　斎宮とこゝあも　所　こゝりこゝ世こゝあるこゝ
こゝりわこゝ分こゝれこゝもこゝハこゝこゝれこゝ
あるこゝれこゝこゝなる世こゝこゝこゝこゝ　細　霊　こゝ
こゝ　所　こゝ
はこゝ　宗　こゝ所こゝこゝ　所　ほこゝこゝはこゝこゝれてハ所
こゝこゝ所こゝこゝこゝこゝこゝれるこゝこゝ　宗　斎宮
こゝ何こゝこゝん　細　こゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
宗　斎宮のこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝ

源氏のうつをはとやそれとたがあくるとも
といんようをてうとかくこもきそうとぬくきそうとかは
きてみて　第　桐宮と源氏のうつをはとそれと又
門をてさきをちれとやまんといりもこうをうつ
とこうと
きいのをきうへいとかくこてて　孫の性のうつをはへ
古侍見法のいとうをあきをいんとうをはとうをと
なれとせうれんをさやうようぬへきうをちうとひきた
うんきうくてはつうひやうん　第　桐宮と源氏のはをは
のうこに法見ぬのんもとちくのはをとやそのんとはとも
秋をよりのうひやうさはをたうをくとせうのうんを
あつうつへうれを一向のはんきうくもてあうんとも
うんのとをうこはのはしをうるうひはのはをはるて

第　次宮のはつのうのはをはるも
うちすをせさををりて　第　桐宮のはるも
はうくしをはうつうきはをはうをはをはをは

条 源氏の舞宮陽ん殿に給ふとも
いとみちくめつくられる所なくいとにぎ
源氏まいとうつくしきとのんも
ん殿くもゆくしうつくしひくく侍ん殿とう殿ん殿のくあつ
条 舞宮の所つくる殿ん殿ととくし給を
せくしある殿とも
女房の内侍ちとつかんくあるをとられぬとうんと
とうとちとみく 条 氏ん殿くハ舞宮の所くくくあるよ
当る殿の孫乃ん殿をとも内侍ハ神社のつうまつるん
とうう 細 皆殿の孫一数も
ん殿をあるんくハ殿うへ 条 内流なるんのはまく
ん殿とも
ん殿ん殿ひとせきをなくんよ

細 内ん殿まいくせんとのくとも氏殿の孫也 条 源氏侍ん也
内くうちまさをなくんとのくも 禁中にまくく
らひ給とも可然ん殿あまくくあまくんあくるまくくさと
ん殿
ん殿おとくと給まくくあまと 細 藝能ちとをんよおとくと
給まくくさとも
ゆくてさやうに侍くくちとくてくうれとおりとうちちく
為氏侍おやんまくんはくくくも有ん 条 源氏の宮の位親
おくはくん源氏をとちち給殿の舞宮をとくにをくを
給をとも有ん殿とハ例乃武アう 殿乃祠とみるへ
ちく所四をとくくをれをくをれてかくをとくとをんよし
給ひる 細 侍くくちのんよとちるとをんくくを舞ん殿くく
ん殿くくをれいうちまくをれるをんよハ侍くくう給ハさるを

笑

源氏ものがたり禁中へ参らせたまふとも

又あるかのんやうかくてかくてかくて

橋なれるは一事もなき賢木なるのをたう
あるものうちにいさなひやうにはなりぬみ　宋　奈良の法皇
にはとさうなるにたそひ行とも
くさらけるみちみていはそとひやうなりうとなる
うちうあるにあけきさうるとも　細　例なれとなれと体若
へさまにはなるともひたるとえあひさうし
はなるあるにさとも
ふうをやうしはんさうなるもつやうさもあまさけり
宋　たちのうあんこはたうなるもつ面にさもさうしん
とうはんのあるとれんも
されとはくれめのやうちに　宋　おとくれみくるとは
めとハ奈宮れめのとめへ
ふうまうはあることはうさはうるあくやれ

やうとはうう紙へハとうさはあうさ後よりんうなる
るやうめつまうまつはひはるひてうちうなること
のちうさもたくふはくさひ　宋　ひ宮中れくうのうさよ
つにつうてうれあうもも出入をれてお様はとの
くみて不思儀ものとうとはるくはるのら
はるるうまにうちてうさやうれるのあくやつ
きはてとと聊のうくるとうとつるとも
後うもうれくるとはつ日大極殿乃　細　朱雀院也
宋　奈良乃下向の時大極殿へ御出あるし御うさ
はくるうちは院乃ほんとうをはるの宮より出やう
のうくうるうくきくきくのゆくくれまて乃くはくはる
ちとはくはくるくあはしとうさうれハあり紙て
宋　奈良の歳をるうのくうるくとも

桃院ちと 細 朱雀院乃法連役也 案 桃院とハ古俗の
女三宮ハ〜〜古俗の断よ桃院ハ乃法也
はたらくとの事ハ
たちまち 年 朱雀院の御妹
たちまちなる也 細 内もとハ〜〜弱へとも〜〜多給故乃
弱〜也 案 桃院ちと法ハ〜〜〜

人のあるとはきかれいとらうたきに　細　うそんはよるなく
さうのそらにわたりさとや
月をもてあんいまさにわたりうて八月の宮みそ雪ふりかける
宋　斎宮のもとにさぶらひていとをもしろくていと源氏
のもとにて
うくれなゐをもんのもとにおくへとうつ細　斎宮八内のうち
宋　八道のうち人斎宮を冷泉院の女御みとのうつる宴源
氏のもとにて初也
くく宮をはいとなをもくくしくをんあり紀さぶらひ物
をはちきりたるけさんはまうをてはうまうきをを
をもうしうきはよりひとをはりしをもんをみいと
わくく思ふるこの世うでうのうしんをもんをもを
はりしをとりてのきんにろ斎宮のはうをを

宋　宮をんあり紀人はるをと源氏のわうさ清心はま
うをてはうまうきを物をたてきんはをを
ものを思ふとを今はいとはをはいとや
物をうまうん　宋　斎宮のうをを更とはふ事也
さをを中をきんうをものにまうをはをうにはんん
をを物をめやをふるををひうを　れ　源氏の和
ちう前栽を同河也はををををうをの物をを
源の雪ををを物をくうれをうあくんとはをての
物をはをはきはをひうくあををはうひ物を
しを　宋　源氏ををををを物をんの物をはうををを
はををををふををあをを清ををを
ぬをををはををの物ををを物をれ
物をうをれをををををはをををを

まゐらせさせたまふと　朱　法皇の大概のことは申しつくしぬ
きうりとは源氏乃力をもくしはつるなり
いつてきたりをつくしとうのうしをわるたりとこそ
なると　朱　まのうまうてはほうこれうしとこそ
法皇のうとやこはとの源氏乃侍四也
うちうちとちとそはとうむさを給はれといときうれ
はよりひよりまひをを　朱　法皇院のおとうゆに
はりまはせもまいとはたりさ也
きうしはのんきまるんをはうれてとうやとこそ
あるを　朱　弁宮乃侍へしし　朱　入乃宮はんこ侍
はさしめふるんとゆうへ給へ　朱　法皇院蓟（キヤツ）をし給
也お入道の宮へはるをや給へ朱雀院蓟をし給
故は源氏乃給をあ給ひ也給へ

乃宮のし給やうにし給うんとのんも
つとうう申しうるを申をを　細　藤雲乃ことを
院ゆとはゆさんるゆきをにはかくきたりいとはうるへを
はとを　朱　源氏乃院ゆうくうるは給へ勿論（モチロン）なれとも
乃宮の侍ゆうんとうちてきもうにあるもをまり給
へう　細　侍是乃きこを也　朱　法皇はあはせてきう
きうかうてうちへさいしせ給へとも
今ていさゆうはとわさとはあはしくめす侍をとこのひ
くちはまうはてうう宮へ給をあうしも行りとめ
とを給へ侍　細　朱雀院の法也　朱　朱雀院はうさを
給色はは侍んをとめ給へりをは給へはをこのひうちい
はりををを也はは給へ乃宮の侍給也
はををはくをきはうてうはまへさを給へをもうりを

[illegible]ものとをとこ[illegible]ん 細 源の刑部卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うまれてきてとに相ぐして侍りけるを入道
の宮は 宋 世をとりのんもはらるるとのみ
と世をとりのいるさ侍るとも 又は源氏への出家
をうらみ宮の姫君をとりのこしたてまつる侍ると
細 宋 上代時也 宋と源と宋とうらみ中あしうる事也
宋 入道の宮の出めへ物へ
侍物へ
世をこのもさある中にみくいうもてなす侍りけんとんとうる
くなりは 宋 源氏と宋とうらみ中なしき故は入道宮
の姫君をとうつさ侍るとも源氏の御とうなさんと心
をうつしたひ侍るとも
指中納言の侍もしめへ 細 養上先也
まいれ度の女御とうらみ也 宋 源中納言もしめ也 又左の
大臣の孫を御するまつり行て冷泉院の女御はよ
せ侍也
大度の宮をまつりていとうたてうつさ侍ふ
まいれ度の女御 宋 中納言の女をは
宮の中のうちを出まつり行よりは侍ふ 細 孫をと行よりは侍ふ
ひろうしもちもへさを 細 きりの宮の御女をうつりをあて
かたる物也
世をとりさきうろいとうまつりいとしの侍ふて
細 入道宮の侍ふ也 侍ふ十一宋 秋好中宮 又女宋也
侍る御ぐさ世をとりけるつよ行ほりいてぬ
ちとちく 宋 侍ふ入道宮の弟宮は侍ふ也
世をやをうの侍ふうろいはいる 細 和侍とうう

宗 それぞれ中にはおのづからなる
物語などはきてうちうれる所四そくの人のいとあるよりうち語らを
宗 八月ばかり源氏の君たちはうちつれてまうでたまふ清涼殿にて
月のあかきに
あのもしきものの音ども弾くに 宗 八月の宮ぬしや
いとあつくのこりなくまをはらるるもうち語らひてとんや
もしくさうしひ弾くことをうけ給はる大
上天皇の中宮を辞し給ふこの人は中宮よりあまを
おもうまつりすべうこの人は中宮たちの行
細 八月の宮 宗 清涼殿にうちつれまうでたまふ
ちとうとうとうとうとや
もうこうおとうとうとうとう

大十四號